

「希望をもって今を生きる」

イザヤ書 40章 31節  
ルカによる福音書 13章 6節～9節

説 教 村上修平牧師(長居教会)

もし明日私たちの人生が終わるとしたら、今日一日をどのように過ごすでしょう？ やり残した仕事があるかもしれません。また、家族や大事な人に伝えたい言葉があるかもしれません。それでは、神様は、今日一日私たちに何を期待されているのでしょうか？今日の御言葉の中には、神様の思いが表されています。イエス様は、「世の終わり」について、次のような譬を話されました。

「ある人が自分のぶどう園にいちじくの木を植えて置いたので、実を捜しにきたが見つからなかった。そこで園丁に言った、『わたしは三年間も実を求めて、このいちじくの木のところに来たのだが、いまだに見あたらない。その木を切り倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふさがせて置くのか』。すると園丁は答えて言った、『ご主人様、ことしも、そのままに置いてください。そのまわりを掘って肥料をやってみますから。』」(ルカによる福音書13章6～8節)

この譬の主人のように、神様は私たちが豊かな実を結ぶことを願っておられます。イエス様は十字架にかけられる前、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。」(ヨハネによる福音書15章5節)とされました。そして、愛する弟子たちに、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」(15章12節)という言葉を残されました。ぶどうの木であるイエス様につながり、イエス様が私たちにされたように、私たちが互いに愛し合い、赦し合い、愛の実を結ぶことを願っておられるのです。

しかし、主人の期待を裏切り、このいちじくの木は三年待っても実を結びません。主人は役に立たないその木を切り倒すように園丁に命じました。しかし、園丁はその木を生かしておいてほしいと懇願しました。園丁はその木を大切に育てながら、きっといつか豊かな実を結ぶことを信じていたのです。この園丁は、イエス様の姿をよく表しています。私たちが実を結ばない木のように、神様と隣人を否定しながら歩んでいる時も、イエス様は私たちの周囲に祝福を備え、変わらない愛を注ぎ続けて下さっている

からです。最後の晩餐の席で、イエス様は弟子たちの足を洗われました。足を洗うのは奴隷の仕事でした。弟子たちは自分が奴隷の仕事をするのが嫌だったので、誰もすすんで足を洗おうとしませんでした。すると、イエス様は夕食の席から立ち上がり、手ぬぐいをとって腰に巻き、水をたらいに入れて、弟子たちの前に跪きました。イエス様は弟子たちの汚れた足をきれいに洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふき始められたのです。弟子たちは皆、驚きとまどったことだと思えます。

私たちはこの一週間いろいろな出来事を経験しました。人に嫌なことを言われたり、また、自分もあんな事をしなければよかったのにと後悔したり。体の汚れは石けんで洗えばとれますが、私たちの犯した罪や心の汚れは、自分ではきれいにすることができません。しかしイエス様は今私たちの前に跪き、私たちの足をも洗って下さるのです。私たちの一番汚いところ、石けんでも洗い落とせない汚れをきれいに洗い、私たちの罪を赦すために十字架の上で自分の命を捧げて下さいました。このぶどうの木であるイエス様から私たちに豊かな赦しと命が注がれます。

宗教改革者ルターは、「たとえ明日世の終わりが来ようとも今日私はりんごの木を植える。」と言いました。明日この世界が終わるならば、今日りんごの木を植えるのは無駄なことです。しかし、イエス様を信じる人は希望をもって今を生きることができます。イエス様は私たちを見捨てることはありません。イエス様は私たちの祈りを通して働いて下さり、その実りを私たちが天国まで持っていくことができるのです。インドで貧しい人々に仕えたマザー・テレサは、「愛は難しいことではありません。愛は微笑むことから始まります。」と言いました。私たちの周りには私たちの笑顔を待っている人々がいます。今日私たちにしかできない使命があります。それが何なのか祈って始めてみましょう。どんな小さなことでも真心を込めて行うならば、神様が働いて下さいます。私たちが今ここでしていること、誰かのためにささげる祈りや苦勞、流す涙は決して無駄にはならず、いつかきっと豊かな実を結びます。

(記 村上修平)